

歴史(地質構造)から始まり、太古・古代・中世・近世以降明治まで、更に民間芸能・名勝・天然記念物の諸項目からなっている。太古の項目は、考古学資料を中心に縄文から古墳時代までを扱い、古代・中世では、安達郷に関する万葉以下の歌を集め、又神社・寺院関係・蝦夷・長者伝説などを適宜配列して、この種の企画としては史料にとほしく困難なところを巧みにカバーしており、編者の苦心の程がうかがえる。近世以降は史料も豊富で且充実している。寛延二年この地方に起つた一揆(積込騒動)や、山論・あるいは、この地方出身の国学者・俳人・画家の紹介など、地方文書・色紙・絵画などを巧みに配して、みる者の興味をそそる。又「災害の歴史」として、阿武隈川・安達太良川との闘いの歴史、或いは、飢饉・火山の噴火など、子から孫へと語りつがれ、町民にとつては忘れることのできないいくつかの事件が、古記録・写真によつて生き生きとその闘いのあとを表現している。尚巻頭に、地質構造図、遺蹟分布布図、巻末には詳細な年表が付され、全体的な理解を助けている。

以上、本書の内容を簡単に紹介したが、勿

論みるものにとつては、いくつかの注文はあろう。例えば、二・三の用語の問題や、又は解説がもう少しやさしい表現をつた方がよかつたのではなからうかとか、或いは、写真と解説とを「左上」「下左右」とかで結ばず番号で表示した方がよかつたであらうとか、古代・中世などには、簡単な概観がつけれたら、等々と。しかしそれも所詮コロンブスの卵である。私は本書の紹介の筆をとりつつ、しばしば、祖父が本書の一隅を指しつつ孫に語りつたえをきかせ、又孫が祖母に解説を読み聞かせている姿を想像した。本書は若者のロマンティズムを呼びさまし、祖父母に歴史を説くものであると思う。我々は市町村史の一つのあり方をここにみるこがでるのではなからうか。本書に引きつづき本宮地方史の編纂準備中という、御健闘を祈りつつ筆をおく。

(福島県安達郡本宮町公民館郷土部編 B5
版 六九頁 年表七頁 昭和三五年九月 本
宮町公民館発行 非売品) (原秀三郎)

藤田至善編

後漢書語彙集成 上

後漢書の完全な索引が出版されることは、我々が久しく渴望していたところであつた。それがこのような見事な形で、その上冊の出現をみたことについては、何よりもまず編者藤田至善氏の長年にわたる御苦労に対して、深い感謝の意を表したいと思う。またこの出版を強力に推進し、応援された森鹿三・日比野丈夫・堀井一雄・木田道太郎・米田賢次郎・その他多くの方々の御努力に対しても感謝の気持ちを抑えることができない。このような古典の索引を勞せずして与えられた我々は幸福である。それだけに索引を作られた方々の献身的な努力に対して、我々は何もつとめと敬意と感謝を捧げねばならないと思う。

周知のように、後漢書の索引には、すでに一九四九年、ハーバード・燕京学社が出版した「後漢書及注釈綜合引得」がある。それは我々に大きな便宜を与えたのであるが、収録された語彙が人名・地名・官名・書名などを主としていたため、社会・経済・學術・宗教

等に関する語彙の検索にはなお不満を免れなかった。今度の藤田氏の書はこの不満を殆んど完全に一掃するものであつて、上・中・下三巻の出版が完成された晩には、収録語彙は十五万を超え、「引得」にくらべて約二倍の語彙を検出することができる。しかもこの豊富な語彙は単に機械的に集められているのではない。標出項目の下に出ている文章をみると、原文に見えない字を括弧で補つたところが多い。たとえば、人名には姓を補ひ、帝后には(光武)帝・(馬)后などと一々具体的に明示し、謂曰・賜・遣・使などの場合には誰に謂ひ、賜わり、やらせたかを明示してある。そのほかにも必要な場合には地名や紀年を添え、必要な主語や補語を括弧で補ふことによつて、引用された断片的な文章の意味が、原文にあたらなくても大体利用者に理解されるようになつてゐる。このことは、編者が原書を十分に読みこなされた上で、利用者の立場になつてこの書を編纂されたことを明示しており、編者の苦心と親切な配慮をうかがわせるに十分である。

また本書には李賢の注と劉昭の志の注が本文と同様の重さで取扱われており、李賢の

注した音と訓を全部検出することができる。李賢注が古語を知る上で重要な手がかりを与えることはいうまでもないが、今やそれが一目で見られるようになつた。これは本書が単に史家にとつてのみならず、経学・文学の専門家にも多大の福音をもたらす点の一つである。このような利点のさらに一つは、注に引用された書物の内容が克明に採られてゐることである。後漢書の注によつて後世に伝わつた書物、たとえば伏無忌の古今注の如き書は、その内容を「古今注」及び「伏侯古今注」の項目で一望することができるようになつた。

「引得」の方では「古今注」の項目すら見えず、しかも著者を誤つて「崔豹」の項に出していることを附記しておきたい。この附記と関連して、本書ではある語彙の下にそれと関係のある語彙、或は参看すべき語彙が*印で示され、或は*印で注意されている。これは誠に親切な方法であつて、先にのべたような編者の深い配慮と相まつて、利用者に大きな恩恵を与えるものである。

いうまでもなく、後漢書のような古典は単に古代中国の事情を知るのに必須であるばかりではない。後の世の中国の文化人にとつ

て、或は程度の差こそあれ、中国文化の影響下にあつた我々の祖先にとつても、後漢書にでてくる話などは、有名な故事として彼らの常識となり、血肉と化しているものが多い。ところが現在の我々にはそれがもはや常識ではないのであるから、一般に中国の文化、ないし中国の影響をうけた文化を理解し、その歴史を知るためには、古典の索引は必要欠くべからざる基礎工具である。先学が「对支文化事業」を始めるにあたつて、十三经・二十四史などの古典や、基準となる史料の索引編纂をその重要な仕事として計画されたのも、研究の基礎を築こうという遠大な意図からであつた(桑原臨蔵「对支文化事業に就ての希望」一九二四年発表、『東洋史説苑』収)。そして本書も右のような計画にもとづく仕事の一つとして着手されたのである。ところが、戦争という不可抗的な障碍があつたとはいえ、その生れ出る陣痛は余りにも長かつた。しかもなお、右の計画が完成され、必要な索引が一通り揃うまでには誠に前途遙遠である。

このような基礎的事業を、より容易に、より早く遂行する方法はないのであろうか。京都大学の吉川幸次郎教授は、尖端的な電子工

学と提携して、純機械的に索引を作る方法を考えておられるという。それができれば申し分はない。しかしその実現になお相当の月日を要するとすれば、現在の時点において何をなすべきであろうか。まず現在の索引編纂事業とその当事者に対して、経済的にも精神的にももつともつと支援がなされねばならない。編纂に当るものを縁の下の力持ちにしておくべきではないし、またその献身的努力にのみ期待するのは合理的ではない。当事者の労が大きいだけに、慰労はさらに大きくあるべきであり、こういう事業に対する社会全体

の支援、なかんずく学界の真に精神的な支援と、政府や財界の経済的な支援とによつて、当事者が誇りをもつて能率的に仕事を進められるような環境を、少しずつでも作つてゆかねばならないと思う。

(B5一〇七八頁 昭和三十五年三月 京都大学人文科学研究所刊) (川勝義雄)

会 告

すでに御承知のことと存じますが、本年七月実施を目標に、郵便料金の値上案が国会に上提されようとしております。値上案によりますと、「史林」の場合、現行一部当り一六円が実に四〇円となり、史学研究会の財政に文字通り破壊的影響を与えることになりますので、史学研究会の主唱により下記学協会各員の賛同を得て、日本学術会議に要望書を提出いたしました。日本学術会議では幸いにも要望をいれられて種々活動をはじめておりますが、会員各位におかれましても、事態をよく認識され、要望書の実現に御協力下さいますようお願いいたします。

会 員 各 位 史 学 研 究 会

要 望 書

このたび発表された郵便料金改正案によれば、我々の学協会機関誌の郵送料は、大幅値上げが予定されている。これは、学協会の運営に深甚なる打撃をあたえ、学問研究の発達を阻害するものである。よつて、学協会機関誌の郵送料負担が現状以上に増大しないよ

う、日本学術会議において善処されんことを要望する。

(説明) 改正案によれば、第三種郵便物(月刊誌等)は五〇%、第五種郵便物(隔月刊・季刊誌等)は実に一五〇%の値上げが予定されている。原案通り実施されるならば、各学協会の経理は重大な影響をうけ、とくに隔月刊・季刊等第五種郵便で発送する機関誌を発行している学協会にあっては、致命的打撃をうける。例を史学研究会の「史林」(隔月刊A5判一六〇頁約一九〇グラム)にとるならば、現行一六円の郵送料は一躍四〇円となり、二四円の値上がりとなる。近時の印刷代の値上がりといえども一部あたり数円にすぎないので、実に二四円の値上がりを見るのである。この結果、予定される郵送料は会費(一部当り一五〇円)に対して二七%を占めるにいたり、もはや学会の経常費をもつては支出不可能である。以上の「史林」の例は、同一の割合を以て各学協会に妥当することはいうまでもなく、改正案が原案通り実施されるならば、各学協会は何れもその運営に深甚なる影響を蒙るのである。ここに、下記学